

ビル・ホソカワとその作品について

— JACLの活動を中心に —

Bill Hosokawa and His Books

— The Activities For The JACL —

山 本 茂 美

Shigemi YAMAMOTO

はじめに

ビル・ホソカワの名前を知ったのは35年前のことである。アメリカ合衆国の日系移民の歴史を研究するおり、いくつかの資料の中に彼の名前はあった。第二次世界大戦中とその前後の時代、日系人たちは多くの差別の中に生きていた。こうした彼らの歴史を研究するうちに、JACLの存在を知ったのである。絶えず耐え忍ぶ一世たちの姿を見て、正しいことを訴えていこうという少数ながら活動してきたグループである。その中心人物の一人がビル・ホソカワであった。ダニエル・イノウエについて昨年研究をすすめたので⁽¹⁾、今回はまさに日系人のための組織として自分たちの不当な扱いに対して立ち向かったビル・ホソカワについて考察しようと考えた。彼が書いた本の初めには次のように書かれていた。

「日本人の人たちが日系アメリカ人について新しい関心をもつようになったことは、非常に私たちを元気づけてくれます。

私は『120%の忠誠』によって、日本の読者たちが日系アメリカ人とJACLという組織について、深い理解をもつようになって下さ

るように希望しています。私たちはお互いに、それぞれ違った国の市民として、同時にライバルでも友人でもあるのですが、それにもかかわらず、たくさんの共通した要素をもっているからです。」

筆者が日系移民の研究を始めた時、今まで知らなかった、アメリカ合衆国と日本の間に翻弄された日系移民の現状を知り、少しでも歴史的事実を知り伝えていきたいと考えた。今まで多くの文学作品や著名な日系人などの研究を進めてきたが、ここではJACLの活動の中心であり、多くの著書のあるビル・ホソカワについて、彼の著書や活動を通じて当時の日系アメリカ人の実態を改めて考察したいと考えている。

1 ビル・ホソカワについて

ビル・ホソカワは、1915年1月にシアトルで生まれた。両親は広島出身の日系二世である。父は1899年に僅か15歳の少年時代に渡米し、鉄道関係の仕事をしていた。日系一世の時代は排日の嵐の中にあり、ビルの育った環境が決して楽なものではなかったことは、容易に想像できる。

ビルは、1937年にシアトルにあるワシントン大学を卒業し、すぐにシンガポールに、次に上海の英字新聞の記者になった。その後シアトルに戻ってから5週間後に、真珠湾攻撃という事件が勃発し、日米戦争が始まることになる。これを機に日系人に対する排日感情がますます高まり、歴史的にも有名になった日系人に対する強制収容がなされることになった。彼もまた強制収容所の命令を受け、ワイオミングのハート・マウンテン収容所で生活することになる。収容所での生活は、砂漠の鉄線に囲まれたバラック小屋で、常に銃をかまえた兵士に見張られた悲惨なものだったという。

収容所に入れられた人々の中には、アメリカの市民権を持っている二世も含まれ、政府のこのような行動に心を痛めたり傷ついたりした者も多数いた。このような生活の中でも人々は何とか生活に潤いを求め様々な創意工夫をしていく。ビルは、ハート・マウンテン収容所で指導者となり、新聞を発行するようになる。彼が発行した“The Heart Mountain Sentinel”によりジャーナリストとしての豊かな才能が認められ、戦争中の1943年には早くも収容所を出て、アイオアの「デモイン・レジスター」の記者になったという。当時収容所ではいくつかの新聞が発行され、筆者もいくつかの新聞について考察したが、日系一世と二世をつなぐ懸け橋として多くの役割を持っていた。

さらに注目したいのは、戦時中にすでに収容所を出られたということである。なかなか収容所を出られなかった日系人が多い中で、彼がいかにアメリカ社会で受け入れられたかを証明している。

終戦直後の1946年にはコロラドの「デンヴァー・ポスト」紙に移り、大西部の中心地ともいべきこの高原都市に住み、精力的に

活躍するようになった。社内での評判は大変良く、日曜版編集長、編集局次長を経て、40年近くこの仕事を続け、引退する時には論説委員長という重要なポストについていた。その間、コロラド大学、ノーザンコロラド大学でジャーナリズム論の講義も担当し、さらにただ一人、社史の執筆を依頼されるほど、内外に絶対的な信望を築くことになった。

このような彼の経歴を見るといかに彼が日系人の戦後の生活苦とかけ離れた輝かしい生き方であったかがわかる。昨年考察したダニエル・イノウエは、442部隊に参加し、右腕を失い、その厳しい条件の中で上院議員にまで上り詰めた。この点で、ビル・ホソカワはペンの方で日系人たちの差別と闘いアメリカ人としての誇りを喚起していったのであろう。

彼は日本人に関する多数の本を書いている。たとえば1969年には『二世、このおとなしいアメリカ人』“Nisei The Quiet americans”が出版されたが、この本が出版されるとすぐに、「ニューヨーク・タイムズ・ブックレビュー」で大きく取り上げられ、一躍全米の注目を浴びたという。1988年、市民的自由法が成立する直前、多くのヒヤリングが日系一世二世にされたことはよく知られている。そしてそれをきっかけに日系三世を中心とした活動により自分たちのルーツを正しく把握したいという活動が始まった。そのおかげで、日系移民の歴史をテーマにした多くの作品が生まれていった。しかし戦後日系人の何人かが文学作品を出版しようとしても見向きもしてもらえなかった、という記録が多く残されている。彼らの作品が日の目を見たのは、三世を中心とした文学作品が出版された時、同時に出版のチャンスを得たからである。このような事情から考えても、ビル・ホソカワの作品に対する扱いが別格のことがよくわかるのである。

その後、多くの大学で日系アメリカ人につ

いての論文が書かれる時、必ず参考とされる基本的な資料となったもので、名著との評判が高いという。彼は、この本で名声を高めたという。この本の最初には次のように書かれている。

「この本はすべてのアメリカ人の間で日系アメリカ人という少数民族を理解してもらえよう努力している。さらに、特に私の子のマイク、スーザン、ピートとクリスティーとその子孫に、現在のみならず将来にわたって理解し評価してもらいたいと思っている。彼らは、自分たちの遺産を今まで以上に誇りに思うだろう。」

この文でもわかるように常に静かにどんな不合理な扱いに対しても大きな声を上げることなくただ耐えてきた多くの日系人の声を代表して、ペンの力で世の中と闘っていたのであろう。そしてこれこそが日系人の本当の姿を広くアメリカ社会に知ってもらう最善の方法だと考えたのであろう。

彼は、多くの一世代や二世の日系人が収容所に入れられたのは、自分たちに非があり恥ずべきことだと戦後自分たちの不当な扱いに耐えてきたのとは対称的に、日系アメリカ人であることを恥じることなく誇りを持って生きていたようである。その後、1972年には、『ジム・吉田の二つの祖国』、“The Two World of Jim Yoshida”という自分の後輩のジム・吉田の、アメリカと日本の間にはさまれた劇的な半生を、ジム・吉田との共著として完成した。ビル・ホソカワの名声がこの一人の日系人の人生を多くの人々に知ってもらう後押しとなったことだろう⁽²⁾。

最近ある日系アメリカ人の男性が、戦時中家族で日本に戻った弟を日本軍の特攻隊として命を奪われた複雑な思いをテレビの中で

語っていた。自分だけは日本の生活になじめずアメリカに戻ったのである。その後強制収容所に送られた自分のことを誰よりも心配していた大切な弟をアメリカ人に殺されてしまったのである。このような悲劇は戦後の歴史の中で数々語り継がれてきた。そのきっかけをつくったのもビル・ホソカワの作品だったと考える。さらに1976年には、「デンヴァー・ポスト」紙の社史で400ページを越す大著、“Thunder The In Rockies”, 1978年には“Thirty-Five Years in the Flying Pan”という、JACLの機関誌“Pacific Citizen”のコラム欄の内容をまとめた本を立て続けに出版している。JACLの依頼によって完成して、1980年に出版された“East To America, A History of the Japanese in the United States”は『ジャパニーズ・アメリカン、日系米人・苦難の歴史』という題で日本でも広く読まれ、高い評価を得た。

ビル・ホソカワがJACLの中心的人物である事は先にも述べたが、1958年にはJACL日系アメリカ人栄誉賞を受賞している。このJACLの活躍の記録をまとめたのが『120%の忠誠』“JACL In Quest of Justice American Citizens League, 1982”である。この本の出版によって、日系人に対する補償運動がたかまり、1988年には市民的自由法が成立して、収容所に入れられた日系人一人一人に2万ドルの補償を手にするようになった。ビル・ホソカワは、1990年にデンバー大学から名誉博士号を受けており、日本の名誉総領事も務めた。日系アメリカ人の中で、彼の名前を知らないものはいないと言われた人物である。

2 ジャパニーズアメリカン

ここでは先に紹介した2冊の本に対して紹介していきたい。まず、日系人の歴史を詳し

くしょうかいしている「ジャパニーズ・アメリカン」から考察したい。

この本の初めには、この本が出版された経緯について次のように書かれている。

「…今世紀の初めの3分の1の期間を通じてこれら日本人の体験が異常なものだったとしても、それをさらに一層類例のないようなものにしたのは、1941年の野蛮な真珠湾攻撃であった。此の事件は両国の間に戦争が起るかもしれないという予想を現実のものとした。そうした予想は、それまで二世代にもわたって政治家たちの標語になっていたし、戦場的な新聞がたえまなく報道する刺激剤にもなっていたのだ。

こうして繰り返し大衆の意識に働きかけていたことが、避けがたい結果を生み出すことになった。開戦後二ヶ月半を過ぎた1942年2月に、合衆国政府は『軍事上の必要』のため、約4万人の日系人の外人居留者に対して、略式の収容命令を出したのである。フランクリン・デラノ・ルーズヴェルト大統領のペンのひと走り、人身保護令と違法が認めている広範な人権の保障条例が、大衆の反発を最小限にとどめるという理由で独断的にも停止されることになった。…

戦争が終わってから、勝利を早めるための犠牲としてアメリカンスタイルの強制収容所に入らされていた日系アメリカ人の体験は、アメリカの歴史の中で隠されたままになろうとしているように思われ始めた。

長い間、日系アメリカ人の歴史を編纂しようという考えが育ってきてはいたが、それを急に促進されたのはこのためだった。サンフランシスコに本部をもつ全国的な市民団体の全米日系市民協会 (JACJ) は、漠然とした将来の計画の一つとして、「二世—私たちの移民の祖先として第一世代—の歴史を取り

上げることにした。1958年～60年の期間に、そういう計画は、当時まだかなり曖昧なものではあったが、研究をすすめる価値があるということをJACLの委員会で意見の一致をみた。」

この内容は歴史的に大きな意味を持っていると考える。この本が出版されたために私たち日本人も当時の日系人の実態を知ることができ、我々日本人が何ができるか、何を求められているかを知るきっかけとなったからだ。1960年、サクラメントで行われた全国大会でこの歴史編集計画が決定された。しかし委員会のメンバーは、この本の全体像をどう決めるかという問題に直面したという。彼らは、日系人の話を記録することについては意見の一致を見たが、支持してくれる人の中には、その話が一体どんなものなのか、どのように語られるべきかというコンセンサスがなかったという。最初はあまり知られていないアメリカの一つのマイノリティー集団が今までの経過の中でどんなドラマを演じ、どんな闘いを行い、どんな涙と笑いがあったのかということ調べ、それを読みやすい本として書きあげるのにふさわしい書き手に依頼するというだけのことだった。しかし学界にいた人々の中には人間的な資料に加えて、進歩を測定したり、古い神話を追放したりするために必要な「厳格」な意味での社会的・経済的なデータを生み出す組織的な研究を求めている者もいた。そこで話し合いの結果、ミヤカワ博士が研究の概要をまとめた。

- (1) 一世とその子孫の二世について全米的なサンプリングを実施し、それに基づいた社会的調査と研究を行なうこと。
- (2) 日系アメリカン人の歴史について、決定的となるような学問的書物を出版すること。
- (3) テープに記録した資料や、保存する価値

のある資料などを含めた総合的な資料収集を完成させ、それをどこかの大学に保管してもらおうこと⁽³⁾。

委員会のメンバーもこれがどれほど重要か理解し、アカデミックな母胎の必要性を認識したという。こうしてこの本は出版に向かい準備が進められた。こうした活動をしている間に日系人についていくつかの本が出版されたという。『バンブーピープル』という日系アメリカ人の法的な歴史について徹底的な研究書も此のひとつである。筆者もこの時代に出版された多くの書籍を読んで研究の手助けにしてきた。これらの本を読むとき、著者が日系アメリカ人か他のアメリカ人かでは視点が違いそれぞれの出来ごとについてのコメントも正反対なこともあった。そのたびにもっと日系アメリカ人の肉声を記録した資料が欲しいと思ったものである。

では、このジャパニーズ・アメリカンにはどのような内容が組み入れられることになったのであろう。

- 1 先駆者たち 此の章には日本からの移民の経緯が書かれている。集団で移民したり漂流中にアメリカの船に助け出されたり、最初の移民の歴史はなかなか複雑であったようだ。
- 2 若者よ、アメリカに行け 明治初年には日本政府は国民がアメリカに行くことを歓迎していなかったという。その後日本政府が移民を許可した背景について述べられている。
- 3 見えない手荷物 日本からの移民の前に送り出された中国人の移民との摩擦について述べられている。
- 4 5, 6章では、初期の移民の苦労話を中心に述べられている。さらに7章でははっきりと中国系アメリカ人との対立を具体的

な事件とともに述べられている。

- 8 排斥への道 ここでは、日本文化を捨てることなく、いつかは日本に帰るつもりであった日系人に対する強い排斥の運動について述べられている。排日移民法の成立の経緯や、紳士協定など戦前の多くの排斥の実態が記述されている。

さらにこの本はハワイの日系アメリカ人との比較や強制収容所の問題などが書かれている。強制収容所については、筆者は多くの資料や当時の新聞、さらに多くの出版物を通じて研究を続けてきたので今回は詳しく述べることは割愛したい。

さらに収容所の中での体験、224部隊への葛藤などが詳しく書かれている。

この本の中でJACLの誕生について書かれているのでこの内容には触れておきたい。

「JACJの誕生。」二世にはこの他にも多くの解決困難な問題があった。二世はアメリカ人の白人からはアメリカ人として認められなかったが、二世個人として力も自覚も持っていた。このような状況を考慮すると、歴史的にごく初期に二世の権利の確立と擁護に役立つ組織作りに才能と力を発揮するように努力した人々がいたことは驚くべきことではない。第一次世界大戦直後、それぞれ別個の二つの運動が、サンフランシスコとシアトルで始められた。運動のリーダーは、それぞれ二世の福祉をすすめ、市民としての地位を高めようと努めている成人したばかりの二世であった。サンフランシスコの提唱者の一人は、若い歯科医師トマス・T・ヤタベ博士であった。彼は1906年、サンフランシスコ教育委員会が隔離政策をとった当時の学童だった。

第一回全国JACL大会は1930年にシアトルで開かれ、西海岸三州と全米各地に散在する二世が出席した。代表はJACLを全米組織にすることを承認し、市民の権利を重視する決

議を行った。議会にケーブル法の修正を請願するとともに、第一次大戦で合衆国軍隊に従軍した東洋人に対し市民権を与えることを主張した。そしてこれらの要求はのちに立法化された。

初めの数年間というもの、JACLの目的はあまりはっきりしたものではなかった。1936年、シアトルの盲目の新聞発行者ジミー・サカモトが全国大会議長に選ばれ、いくぶんあいまいな点もあるが野心的な計画をたて、二世に対し善良なアメリカ市民になるように呼び掛けた。

- 1 国民の福祉を増進するために地域社会で他の市民と共通の利益を目指し活動し、国民の社会生活に貢献する。
 - 2 農業、工業、商業で重要な役割を果たし、国民経済の繁栄に貢献する。
 - 3 賢明な有権者、愛国心を持つ市民として公共の福祉に貢献する、
- この件についてビル・ホソカワはこの本の中で次のように述べている。

JACLの目標は母性愛と同じように挑戦や論争を目指すものではなかったが、特に当時は不況の圧力によって二世に対する経済的、社会的敵意が激しくなっていたので、その目標をどうやって達成すればよいか誰もわからなかった。日系人自身が社会に受け入れられていないのに、どうやって社会生活に貢献できるのだろうか。働き口もないのにどうやって経済的福祉に貢献できるのだろうか。目標は定めたものの、JACLはどうすればその目標に達成できるか示すことになると、他の誰よりも無力であった。

地域によってはJACLと一世の組織の間にライバル意識のような要素がみられ

るところもあった。二世は熱心に権利を主張し、一世は地域社会の主導権を譲る気にはなれなかったという。多くの一世は晩婚で、日系社会は一世代抜けているという事実によって事態は一層複雑だったようである。60代の男の長男が20代であることも珍しくなかった。此の大きな年齢差によって、一世は、二世はまだ若く責任ある立場に立ち、権力をもつことはできないと考えた。

1930年代末の日系人社会内部はこのような不穏な状態にあり、日本は軍部に支配され、武力的侵略への道をたどり、必然的に合衆国との戦争がおこる結果となったという。アメリカ社会にいながら日本の当時の親子関係に近いことがやはり日系社会の問題点であっただろう。そしてやがてくる強制収容所での体験がいかに一世のプライドを傷つけ生きる望みも失っていったかよくわかる。

さてこの本の中でビル・ホソカワが中心的になって一番伝えたかったのは「補償」要求の運動についてであろう。この本の中では、次のように述べられている。

ともかく、強制立ち退きからはほぼ30年過ぎた。1970年代初め、若い日系人の間で、自分たちの基本的損失に対する何らかの形での補償を要求する運動が始まった。彼らは最初これを補償と呼んだ。この語は即刻採用された。次に、日系新聞では、補償の利点と此の補償がどのような形を取るべきかについて、熱心な討議がされた。1978年7月にソルトレークシティーで開かれたJACL全国大会では、「補償のための全米委員会」が立ち退き者一名あたり、無税で25000ドルを請求すると発表した。約12万人の日系人がキャ

ンプで過ごしたのであるから、請求総額は約30億ドルで、これは今のようなインフレの時代においても高額である。この提案は修正され、受取人としては死亡した立ち退き者の相続者及び中南米からアメリカに強制収容された日系人が含まれることになり、正式代表者たちは満場一致でこれを承認した。

この文章を読んでアメリカの強制収容所に入れられたのは、アメリカ合衆国の日系人だけでなかったということを知り改めて驚いた。

「続く数カ月の間に、JACLは金銭上の補償を強調することをやめ、不正に対する補償の原理に焦点を合わせた。JACLはまた、内部の反対にもかかわらず、「委員会」方式を採択し、二世の上院議員、イノウエ、マツナガ、ハヤカワに、カリフォルニア選出民主党員アラン・クランストン、アイダホ選出民主党員 فرانク・チャーチ、アイダホ選出共和党員 ジェームズ・A・マックリュアが加わって、委員会設置法案を提案した。この委員会は、補償請求を調査し、下院にどのような行動をすすめるかを決定するものであった。上院でも、128人の議員が同様の法案を提出した。」

ダニエル・イノウエについては昨年彼の自叙伝などを研究したが、日系人のために政治を通じて名誉を回復するために尽力を尽くした経緯が書かれていた。自分たち二世の立場を守ることと自信をすっかり失い生きる意欲を失いつつあった一世のために仲間とともに闘ったのである。その苦勞については次の文の中でも推測される。

「JACL大会では満場一致で要求の利点に関して日系人社会の意見は統一からは程遠い。日系人の多く、ことにアメリカで自分の地位を確立する際に過去を葬った人々は、補償のことなど念頭に置こうともしない。他方、補償を提案した人々は、アメリカに、自国が無力な少数派に対してどんな誤りを犯したかを忘れさせないことの重要性を強調し、損害を受けた者のために金銭的補償を求める原則を「アメリカのやり方」として持ち出すのである。」

最後にこの本は次のように締められている。

「議会が補償要求に対してどのような形と内容を与えようとも、JACLが自分たちの政府に対し、両者にとって重要な問題について真っ向から立ち向かう決定をしたことは、日系人の波乱に富んだ歴史における重大事件である。これが、自信と成就に基づいた賢明な動きであったか、偏見、頑固な誤解、完全とは言えない政治制度の現実などを理解せず、感情と高慢な理想主義に駆られた一集団の無分別な行動であったかは、時が経たなければわからない。

しかし、この問題が満足のいく解決を見なくとも—そして、おそらく、アメリカ社会全体と同じくらいばらばらになっている日系社会の分子全部を満足させることも不可能であろうが—大変な障害にもかかわらず日系人がアメリカで達成した地位は、民族としての彼らの質を雄弁に物語っている。彼らの祖先は、東方からアメリカへやって来た時、アメリカ合衆国のモザイク模様を豊かにする、価値

ある材料をこの国に運び込んだのである。」

1988年彼らの努力が実を結び、市民的自由法として成立した。2万ドルを手にしたことになった一世たちは、自分たちのためではなく、自分の息子や孫の学費として使った人が多かった。日系アメリカ人の大半は、お金ではなく名誉が回復したことで満足だったのかもしれない。

3 120%の忠誠

この本の中でビル・ホソカワは、日本語版の最初に紹介した文面の後に次のように語っている。

「日本を母国とする私たちアメリカ人には、語らなければならない重要な歴史がありますが、長い間私たちは、日本人がそのことにあまり興味を持っていないと感じてきました。結局、私たちの両親や祖父母たちが、母国を捨てて遠い異国へ行き、そこで生活をしたのだと思われたからです。

しかし、私たちを結び付けているのは、人種のほかに何かもっとあるのです。…一世たちは人種や言葉が違うため、アメリカ社会に同化するのに大変な困難に直面しましたが、皆がこの伝統にしっかり結びつけられていました。…1941年に日本の真珠湾攻撃から太平洋戦争が始まったとき、私たちと同じはずのアメリカ人の多くは、私たち日系アメリカ人もまたアメリカ人であり、日本の軍国主義者たちの行動に対して同じように憤慨しているのだということに、まったく気付かなかったのです。アメリカはその民主的な人権の原則を忘れ、日系アメリカ人を収容所のなかに押し込めるといふ、重大な誤りを犯しました。しかし同時に私たちの多くは、もし日本がア

メリカを攻撃しなかったら、私たちは鉄条網の中に閉じ込められなかったことを知っていました。

戦争中、日系アメリカ人の唯一の全国的な組織であるJACLは、まさに私たちのもっとも重要な代弁者でした、本当に貧弱な形で始まったそのJACLの物語りがこの本のテーマなのです。この本の中で詳しく述べなかったことで、しかも私がこの序文で書いておきたいと思うことがあります。それは、日系アメリカ人のための公正を求めたJACLの努力は、日本人自体にとっても大きな影響を持っていた、ということなのです。アメリカへの日本からの移民が時々制限されていたということは、すべての人がよく知っていることだと思いますが、その上に日本からの移民は、人種が違うために、帰化してアメリカ市民になることを許されていませんでした。1924年にアメリカ時の議会は、アジアからのすべてに移民を禁止する法案を通過させました。これは日本にとって、顔に激しい平手打を受けたようなものでした。この事が日本の民主的文官による政府の力を弱めさせ、代わりに軍国主義者たちの台頭を招くことになったのだ、と信じている歴史家が何人もいます。

戦後になって、日米関係が完全に平常に戻る以前に、アメリカの移民法や帰化法の不公正を、どうしても排除する必要がありました。このことが、JACLの主な目標の一つだったのです。そのために実に激しい闘いが展開されましたが、その詳細は本書の中で述べられています。その目標が達成されたのは、実に1952年のことでした。』⁽⁴⁾

このように日系人に対する多くの差別に対する運動が続けられたからこそやっとアメリカ人としての地位を確立していけるようになってきたのである。

「此の時からは、一世もまたアメリカの市民権をもち、市民としての一切の権利を行使できるようになったのです。このことはまた、他のアジア諸国ばかりでなく日本も、これから移民の割り当てをもつようになり、それらの新しい移民たちも必要条件を満たすようになれば、すぐにアメリカ市民になれることを意味していました。他の何にもまして、JACLが全力を傾けてそのその実現のやめに闘ったこの立法こそ他のすべての国と対等な国として日本の地位を高める助けとなったものであり、疑いもなく、日本の目覚ましい経済復興にも多大な貢献をはたすことになったのです。

現在では、日本人と日系アメリカ人を結び付ける別の種類の問題があります。日本経済の巨大な成功が、アメリカ人の間に不況と失業を巻き起こしました。不平不満がたかまるにつれて、日系アメリカ人はこの問題と直接何の関係もないのだということを見失ってしまったアメリカ人が、実はすくなくなくいのです。」

私たちは日系アメリカ人が日本語を話す事が出来ないことをとても驚いたものだ。それは日本人が日系アメリカ人はアメリカ人であって日本人ではないことをきちんと認識できていなかったからだ。そして同じことがアメリカ社会でも起きていた。だからこそわれわれ両国が仲良くすることがとても重要なのだということがよくわかった。そしてこれこそがビル・ホソカワが日本人にこの本を通じて知ってほしかったことなのだと思う。

「組織としてのJACLも、そしてそのメンバーの一人一人も、皆自分の国アメリカと祖国日本が友好関係を保つことに重大な関心を払っているのです。日米関係が損なわれると、

私たちはつらい思いをしなければなりません。両行の関係が平穏で友好的であれば、私たちもまた枕を高くして眠ることができるのです。

私はこの本によって、日本の読者たちが日系アメリカ人とJACLという組織について、深い理解を持つようになって下さることを希望します。私たちは、お互いに、それぞれ違った国の市民として、同時にライバルでも友人でもあるのですが、それにもかかわらず、たくさんの共通した要素を持っているからです。」

さてこの本には先にのべたようにJACLの歴史や活動が述べられている。ジャパニーズ・アメリカンの中でもその活動は紹介したのでここでは、基本的なことと、JACLの将来について考察していきたい。

JACLの規約の決定⁽⁵⁾

第一条 組織の名称は全米日系アメリカ市民協会とする。

第二条 全会員は、いずれかの支部に所属しなければならない。

第三条 本部は次期大会開催予定地に置く。

第四条 役員は会長、副会長、書記、文書係、会計とする。

第五条 役員は義務。

第六条 JACL執行部は全米評議会と言われ、役員全員と各々2名ずつの支部代表からなる。

第七条 地方評議会は全米評議会に所属する。…

この規約に関して不備な三点があることは明らかであると思われる。つまり協会の目的、会員資格、役員選出法について何もふれられていないことである。このようにスタートか

らなかなか何かにつけて順調に事が進まなかったようであるがその後、戦前戦後の多くの日系人を取り囲む差別や不当な扱いについて闘い続けたのである。先の本の紹介でも述べられたようにこうした日系二世の行動を快く思わない一世たちの反対とも闘わなければならなかった。日本人は、耐え忍ぶことを美德と考える人種だった。アメリカ人として生まれ育った二世たちはそれが我慢できなかつたし、このまま終わってはいけないと強く考えた。

この本の中では、過去の歴史と強制収容所での出来事、そして、戦後の生活について書かれている。この内容は、先に紹介した『ジャパニーズ・アメリカン』と重複する部分が多いのでここでは最後に書かれたJACLの将来についての記述に注目したい。

1988年の市民的自由法の成立に奔走したJACLの活動を終えた著者は次のように述べている。

「JACLの将来」

JACLの将来は委員会の報告と、議会がそれによって、これから先大きな影響を受けるだろう。連邦支出の大幅削減の時期に、相当の額になる予算の承認を得る見込みはないと思われる。…イノウエ上院議員は、財政的削減に反対なわけではないが、主たる目的は、何が起きたかについての歴史的、公的記録を確立し、緊張が生じた時に起こりうる事態に対する警鐘だと力説した。

委員会の勧告がどのようなものであれ、議会は、強制立ち退きとは関係のない現下の事情に左右されるだろう。例えば、インフレ、レーガノミックス、連邦予算の赤字、日本との貿易摩擦の収支のバランス、そして、デトロイトの自動車産業の不振さえ影響を与えるだろう。…人種を理由に、アメリカの少数民族に不正が行われたのか。もしそうであれば、

犠牲者は補償されるべきか。

JACLは最初の50年とはまったく異なるものになるだろう。国そのものが変化した。しかし日系アメリカ人という少数者集団に起った変化の方が、はるかに深遠である。これから先の50年には、静かにドラマの進行を見守り、何が起き、それが一体どのような意味なのかを我々に語ってくれる目撃、『羅生門』には登場しなかった客観的な目撃者が必要であろう。」

終わりに

1988年レーガン大統領は、市民的自由法に署名し、第二次世界大戦中の強制収容に対して、一人2万ドルの補償を約束した。このようにビル・ホソカワはJACLの活動を通して日系アメリカ人の地位を向上させるために尽力を尽くしてきた。政治家として日系社会のために生きたダニエル・イノウエと並び日系人の中でその名を知らない者はいないといわれているビルである。今回紹介した2冊の本は、そのビルが中心となって取りまとめた日系アメリカ人の歴史を統計を取りながら、紹介している。単なる文学作品ではなくしかし単なる学術論文ではなくノンフィクションの歴史文学に近いのであろう。今回この二冊を読み返した時、日系アメリカ人の存在を知り、そしてその苦難の歴史を知ったときの衝撃を改めて思い出した。戦後友好国であると信じ憧れたアメリカという国が日本人の血をどれだけ拒否し差別を繰り返したかを知り一時はどうしていいのかわからなかった思い出がある。しかしビル・ホソカワの言葉ではないが自分ができることは、たくさんの歴史書、さらに日系人の生活を扱った作品を紹介し日系人の苦難を知ってもらうことだと考えた。21世紀に入り、現在はリトル東京も他の少数民

族のすみかになりつつあり、日系人社会の存在は薄れつつあるという。日系アメリカ人の作品を探すのも難しくなってきたという。今後は日系人という枠を払い彼らが一アメリカ人として生きていく姿を追っていければと考えている。

注

- (1) ダニエル・イノウエについては、『金城学院論集』人文科学編、第10巻第2号、2014年、3月号の中で詳しく研究をした。
- (2) 猿谷要編、「アメリカ史重要人物101」, pp208-209, 新書館, 東京, 1977.
- (3) R・ウィルソン, B・ホソカワ著, 猿谷要監訳, 「ジャパニーズ・アメリカン」, pp4-8, 有斐閣, 東京, 1982.
- (4) ビル・ホソカワ著, 猿谷要監訳, 「120%の忠誠」, ppii-iv, 有斐閣, 東京, 1984.
- (5) ビル・ホソカワ著, 猿谷要監訳, pp38-39.

Works Cited

猿谷要編, 「アメリカ史重要人物101」, pp208-209, 新書館, 東京, 1977.
 R・ウィルソン, B・ホソカワ著, 猿谷要監訳, 「ジャパニーズ・アメリカン」, pp4-8, 有斐閣, 東京, 1982.
 ビル・ホソカワ著, 猿谷要監訳, 「120%の忠誠」, ppii-iv, 有斐閣, 東京, 1984.
 ダニエル・イノウエ, 森田幸男訳; 上院議員ダニエルイノウエ自伝, 東京, 彩流社.
 Danieru.k.Inoue, *Journey To Washington*, 1967, Sairyusya, Tokyo

山本茂美, ダニエル・イノウエの生涯—日系アメリカ人最初の上院議員の光と影—, AIT愛知工業大学研究報告, 48号, Vol48, 2013.

Works Consulted

北村崇郎, 『一世として生きて』, 草思社, 東京, 1992.
 黒川省三, 『アメリカの日系人』, 教育社, 東京, 1979.
 鶴田真, 『日系アメリカ人』, 講談社現代新書, 東京, 1971.
 村上由見子, 『アジア系アメリカ人』, 中央公論社, 1971.
 若槻康雄, 『排日の歴史』, 中央公論社, 東京, 1971.
<http://news-log.jp/archives/5950>
 前山陸; ハワイの辛抱人, お茶の水書房, 東京, 1986.
<http://www.foxnews.com/politics/election/candidate/Daniel-ken-inoue/>
 ジョン・オカダ, 中山容訳; ノーノーボーイ, 東京, 1981.
 植木照代ほか, 「日系アメリカ文学 三世代の軌跡を読む」, 創元社, 1997年, 東京
 海沢富 (トミ・カイザワ・ネイフラー), *Our House Divided*, University of Hawaii Press, 1991, Hawaii.
 武智鎮典, 「442部隊の真実」, ポプラ社, 2012年, 東京.
 西山千, 「真珠湾と日本人」, サイマル出版, 1991年, 東京.
 柳田由紀子, 「二世兵士 激戦の記録」, 新潮新書, 2012年.